

介護に対し葛藤を抱えた介護者の思い・態度と 訪問看護師の支援に関する分析

黒河 佳代¹⁾ 西崎 未和²⁾ 菊地 珠緒²⁾ 森口きよ子¹⁾

要 旨

介護に対して葛藤を抱えた介護者の思い・態度とその変化を明らかにし、訪問看護における看護援助について考察することを目的に、1事例に対し質的帰納的分析を行った。介護者の思い・態度として、母親らしいことをしてもらえなかった・厳しく当たる・腹立たしい・自分がするのは仕方がない・気にかかる・良くしてあげたい・介護する・介護が大変・長期の介護は望まない・介護サービスを頼りにするという10のカテゴリーが得られ、母親らしいことをしてもらえなかったという思いと、自分がするのは仕方がないという思いとの間で葛藤していたことが明らかになった。介護者の思い・態度の変化として、良くしてあげたいという思いが関わりの後半に現れ、介護が大変という思いは減少した。看護師は介護者の思いに目を向け、これを受け止め、努力や小さな変化を認める関わりが必要である。また介護者にとって介護が意味あるものとなるよう支援する必要がある。

キーワード：介護者、葛藤、思い・態度、訪問看護、家族看護

I. はじめに

在宅での療養において介護者が果たす役割は大きく、介護保険制度が定着しつつある昨今でも、要介護者の生活は家族によって支えられている部分が多い。しかし、実際に訪問看護を行う中で、介護者と要介護者との関係性が良くなかったり、介護に対し否定的な気持ちを持ちながらも様々な状況から仕方なく介護を行っていたりと、介護に対し葛藤を抱えた介護者に会うことは多い。在宅介護の継続のために介護者を支えていくことは不可欠であるが、家族関係の複雑さから援助の方向性が見出せず困惑したり、今の関わりでよいのかと疑問に感じることも少なくない。

在宅療養を支えていく上で、介護者の介護に対する姿勢やモチベーション、要介護者に対する思いを知ることは、重要である。それらを知ることで介護者への介護上の指導内容や心理面への働きかけ方が有効なものになる。そこで、効果的な看護援助を考える上で介護者の思いやそれを表している態度を明

らかにしたいと考えた。

II. 目的

介護に対して葛藤を抱えた介護者の思い・態度とその変化を明らかにし、訪問看護における看護援助についての考察を行う。

III. 用語の操作的定義

1. 葛藤とは、相反する2つ以上の要求や衝動が対立したまま精神内界に存在する状態である¹⁾。本研究では葛藤を介護者の心の中に相反する動機・欲求・感情などが存在する状態とした。
2. 思いとは、一般的に①思うこと、思うところ、考え、思慮。②感じること、感じ、経験。²⁾などを指す。本研究では思いを介護者が抱く介護に対する気持ち、感情とした。
3. 態度とは、①考えたことや感じたことの現れとしての表情・動作・姿勢・ことばつきなど。身ぶり。そぶり。②事に応ずる身がまえ・心がまえ。³⁾の意味である。本研究では、介護者の介護に対す

1) かわさき訪問看護ステーション

2) 川崎市立看護短期大学

る思いや考えが、表情・動作・姿勢などに現れたものとした。

IV. 研究方法

1. 研究対象

研究者が所属する訪問看護ステーションの利用者とその介護者で、介護に対して葛藤を抱えている1事例。

2. 研究期間

平成16年6月から平成16年9月まで。

3. データ収集方法

訪問看護ステーションの看護師である研究者1名が通常業務の範囲で訪問看護を行い、訪問後に看護師の関わり・言葉かけ、要介護者および家族の反応、看護師の認識などをフィールドノートに詳細に記録した。

4. データ分析方法

- 1) フィールドノートのすべての記述を、家族の言動・反応、要介護者の言動・反応、実施した看護、看護師の認識・判断、その他（ソーシャルサポート等）に分類・整理した。
- 2) 分類したデータから、介護者の思い・態度に関する記述とそれに影響すると思われる部分を抜き出し、意味あるまとまりごとに表題をつけコードとした。さらに類似のコードをカテゴリー化し名前をつけた。
- 3) 各カテゴリーに含まれるコードを、そのコードが現れた日付（訪問日）によって整理し、カテゴリーごとの介護者の思い・態度の時間的変化を見た。
- 4) 分析は共同研究者間で数回にわたって行い、繰り返し点検、討議を重ねることによって、妥当性と信頼性の確保に努めた。

5. 倫理的配慮

事例の対象者には以下について文書と口頭で説明し、同意の署名を得た。

- 1) 匿名を保持し、プライバシーを守ること。
- 2) 本研究以外の目的でデータを使用しないこと。
- 3) 研究への協力は任意であり、協力しない場合でも今後の訪問看護において不利益はないこと。ま

た、途中で中断も可能なこと。

- 4) 研究結果を公表する際は、個人が特定されないように処理をすること。

V. 結果

1. 対象の概要と実施した看護

1) 対象の概要

要介護者は80歳代後半、女性。多発性脳梗塞の既往がある。2年前から認知症があり、大きな声をあげたり暴言を吐く。認知症の症状が強くなり転倒を繰り返すようになったことで、平成16年3月から訪問看護を導入することになった。要介護5であり、日常生活上のことは、ほぼ全介助である。主介護者は同居している長女（60歳代前半）であり、長女の夫と3人で戸建住宅に暮らしている。長女夫婦は1階で自営業を行っており、本人の居室は2階である。日中は居室内の家具調ポータブルトイレに座って過ごしており、立ち上がり転倒する危険性があるため抑制ベルトを使用している。テレビをつけているが見るともなくボーっとしていたり大きな声をあげている。長女は要介護者の暴言に対して強いストレスを感じていることや、要介護者が大声を上げることにより自分も眠れないことなどを看護師に訴える。要介護者は長女の希望で週3回デイサービスに通っている。また、デイサービス日以外の週2日は他市に住んでいる長男が来て、受診や食事の介助を行う。そのほかの昼、夕食時にヘルパーが訪問し、保清や食事介助を行う。訪問看護は週1回1時間の訪問である。要介護者は自営業家庭の一人っ子で大事に育てられてきた。結婚し、一男、三女をもうけ育てる。苦勞をした時期もあったようだがその頃の話はせず、生まれ育った土地の話をうれしそうにする。夫はすでに他界している。次女、三女は介護には非協力的であり、また長男の嫁も関わっていない。

2) 実施した看護

長女が思いを語ることで母親への思いを整理して介護に当たれるようになるのではないかと考え、以下のような援助を行った。

尚、実施した看護は、鈴木、渡辺らの家族援助方法の分類を参考に「個々の家族成員に対する援助」「家族の関係性に働きかける援助」「家族単位の社会性に働きかける援助」に整理した。鈴木、渡辺は「家

族援助は、個人に焦点を当てた援助から家族成員間の関係性に焦点を当てた援助へ、そして家族単位の社会性に焦点を当てた援助へと、次第に広がっているものであり、それが家族援助の特徴でもある」⁴⁾と述べている。

(1) 個々の家族成員に対する援助

①肯定的なフィードバックをする

水分摂取を自分で行えるよう落としてもこぼれない形態のコップを勧めたところ、早速購入しており、「カップ買ってくださったんですね」と長女の行動の良い点を肯定した。

②家族に対する援助の意思を伝える

「Aさんのためだけでなく、ご家族の方に対しても何ができるのかなと思っています」と家族への援助もしていきたいという意思を伝えた。

③労をねぎらう

「長女さんだから、色々任されたり、頼られたり人のお世話をするようになってるんでしょうか」と長女だからこそできるのではと労をねぎらった。

④介護方法の助言・指導

- ・褥創ができた原因を長女とともに考え、対処方法を伝えた。
- ・食事と食事の間で水分摂取の介助をしてもらわないと脱水、脳梗塞のリスクがあることを伝えた。

(2) 家族の関係性に働きかける援助

①家族のコミュニケーションを促進する援助

長女が「母からありがたい言葉はないんですよ。小さい頃から言ったことのない人だから絶対言いません。すみませんと言うんですけどね」と話す場面では、要介護者に対して「長女さんにありがとうって言ったら喜ぶですよ」と自己表現を促した。

②家族成員の相互理解を助ける援助

- ・「兄は私任せで言われたことはするけどそれ以外はしない」という言葉に対して、「言われたことをしてくれるだけでもよいのではないか」と長男に対し肯定的な認識が持てるように働きかけた。
- ・認知症についての理解を促すために、母親の暴言に対する長女の感情的な対応に対しては「一番身近な人にそういう言葉が出るんです

よ」と話したり、ヘルパーとの外出時には歩行できるのに家ではやろうとしないことに腹立たしく感じていることに対し、「外では緊張感を持つてるからしゃんとするんですよ。身内の人とか一番近い人に症状は出ます。家に帰ってくると緊張が緩むのではないのでしょうか」と疾患の特徴を説明した。

- ・要介護者のよい変化を認識できるように「以前は不眠だとかもっと大変だったようですが、今はだいぶそのときの状況よりよくなったと思います」と状況の変化を示した。
- ・要介護者の良い点に目を向けられるように、ショートステイの記録に食事を自己摂取したと書いてあることを示した。

(3) 家族単位の社会性に働きかける援助

①ケアマネジメント

今後の褥創対策のために、エアマットレスのレンタルについてケアマネジャーと連携を取り、家族が社会資源を有効に利用できるように援助した。

2. 介護者の思い・態度

介護者の思い・態度として76のコードから10のカテゴリーが得られた(表1)。

1) 母親らしいことをしてもらえなかった

「私が病気で大変だったとき、母は民生委員をやったり、町会の役員をやって、買い物くらい行ってきてよって言っても、何時に帰ってくるか分からないなんて言うんですよ」「お嫁さんが私と同じ病気で、来たときにお嫁さんには上で休んだらって言うんですよ。私には一言も言わないのに」「私が高校受験の頃に母は遊びに行ったりしていました」「本人には一人暮らしなんだからってよく言い聞かせてるんですよ。もう昔家事することも何も放棄したんだから一人でやっていくんだってわかってるはずなんですけどね」というように、過去に長女が病気を患ったときに手伝ってもらえなかったことや、長女にとっては、母親としての役割を放棄したという思いが解決されないで残っている。

2) 厳しく当たる

「前よりは暴言吐くこと減りましたが、くそばばあとか言ってますよ。死んでやるって言ったり。死んでみなよ、見てやるからって言いますけどね」

表1 介護に対し葛藤を抱えた介護者の思い・態度

カテゴリー	コード
1) 母親らしいことをしてもらえなかった	<p>病気を患ったときはつらかった 病気を患った際、母には手伝ってもらえなかった 嫁のことは気遣っていたが、自分のことは手伝ってくれなかった 高校受験のときも、母は好きなことをやっていた 母は小さい頃からありがとうを言わない 昔、母親としての役割を放棄したことを忘れない</p>
2) 厳しく当たる	<p>暴言には感情的に対応する 自分の厳しさを正当化する 暴言には、長女も言い返すことで対処している 暴言には厳しい口調で返す 食事を摂らないがそのままにしている おしっこ一杯で汚い中にいたら誰も来てくれないよと言って起こした 叫ぶことに対しては強い口調で返す 短絡的に受診の判断をする</p>
3) 腹立たしい	<p>理解できるにもかかわらず暴言を吐くところが腹立たしい 外では歩行できるのに家ではやろうとしないことが腹立たしい 理解できるにも関わらず、「わかって言っている」ことが腹立たしい 家では自分で食べないがショートステイでは食べている 馬鹿にされているように感じる 美容院では手引き歩行している</p>
4) 自分がするのは仕方がない	<p>妹（次女）が介護をできないのは仕方がない 在宅で続けていくことは仕方がない 妹（三女）が介護をしたくないのも仕方がない 兄嫁のことは当てにしていない 人の世話をするように育てられてきた</p>
5) 気にかける	<p>排便状況を気にかけている 傷が悪くなることを心配する 皮膚トラブルを心配している 排便状況を気にかけている 排便状況を気にかけている 排便状況を気にかけている ショートステイ中の排便状況を気にかけている ショートステイから帰った日に体調が悪かったことを気にかけている 傷の具合も気にかけている 新たな傷を気にかける 排便状況を気にかけている 左手の痛みを気にかけている 排便状況を気にかけている</p>
6) 良くしてあげたい	<p>美容院へ行かせてあげたい 外の空気を吸わせてあげたい</p>
7) 介護する	<p>受診状況を訪問看護師に報告する ショートステイ中の対応を聞いている 受診の手はずを整える 危険防止のための工夫をしている 誤飲しないよう食事内容に気を配っている 左手がむくんでおり手を上げるようにしている 介護用品を購入する 今後の対策についても考えている 食事の合間に水分を飲ませに行っている 褥創対策についてケアマネジャーに相談する 天候を考え、受診させるか決めている 長女なりに褥創予防をしている 褥創については長女なりに原因を考えている 訪問看護師の助言を取り入れ、牛乳を飲ませている ケアマネジャーに言われた通りに椅子に移している クーラーの風が直接当たらないようにしている 褥創に対し長女なりに工夫して予防具を使用している</p>

カテゴリー	コード
8) 介護が大変	兄は介護にあまり協力しない 兄は介護を私任せにしている ショートステイ後は、階段を上るのが重労働だ 以前、下肢に潰瘍ができ大変だった 昨年潰瘍になり通院が大変だった 足が利かないから階段の上げ下ろしが大変 傷には敏感になっている 傷は自分では見ない 食事介助が大変だ 何度も通院させるのは大変だ 床ずれがあるようなので、薬を塗って欲しい おむつ交換時、本人が手を出してきて大変
9) 長期の介護は望まない	しばらくは介護が続くそうだが いつどうなってもそのままの形で、と思っている
10) 介護サービスを頼りにする	ショートステイ中はゆっくり休めた デイサービスで色々気にかけてくれる ショートステイ中は孫と外出でき良かった デイサービスでは機械浴にってもらっており助かる 褥創処置はヘルパーにもらっている

や「今日起こしに行ったらおしっこ一杯で汚い中にいたら誰も来てくれないよって言って起こしましたよ」というように、暴言には感情的に対応したり、叫ぶことに対しては強い口調で返していた。それは、「一人ぐらい厳しく言う者がいたほうがいいですよ。主人も兄も優しいですからね」と、自分の厳しさを正当化しており、そのような思いから「厳しく当たる」という対応になっていた。本人は強い口調で返されると一時的に黙るが、認知症のため気にとめている様子はみられなかった。

3) 腹立たしい

「美容師さんが手を引いて、おいっちに歩いてたんですって。しっかりしゃべって、静かに座ってたって。ヘルパーさんも驚いてました。家に帰ってくると全然歩けないんですよ。足なんかぶらぶらして。階段上がる時だって叫んでますよ」と、家では自分でできないが、外ではできるようだという思いや、「ヘルパーさんが来るとき、私が通ったら、くそばばあなんて言うんですよ。私がくそばばあなら面倒みれないからみないよって言ったら、黙るんですよ」「デイサービスの日起きないって言ったから、じゃあデイサービス行かないのって言ったら起きるって言うんですよ。覚えてるんですかね。わかってることもありますよね。わかってて私達のこと馬鹿にしたように言うこともあるんですよ」と、理解

できるにもかかわらず、分かって言っていると馬鹿にされているように感じていた。

4) 自分がするのは仕方がない

「このままで仕方ないのかなと思っています。ケアマネジャーさんには施設に入るのはもっと優先順位の高い人からだし、ずっと後になるだろうって言われてますから」と、在宅で介護を続けていくことは仕方がないと捉えていた。

また、「妹（次女）は母に甘えたい年頃に、妹（三女）がいたから甘えられなくて、私とか兄が面倒を見ていたから、母親に対しての思いっていうのは薄いのかもしれない。だから介護したくないっていうのは仕方ないかなって思うんです」「父の単身赴任で父、自分、妹（次女）で別のところにいたことがあって、炊事をしたり下の子の面倒を見ましたよ」と、妹たちが介護をしたくない、できないことは仕方ないと考え、自分は人の世話をするように育てられてきたのだし、母親の介護をしていくことは仕方ないという思いが表出された。

5) 気にかかる

「月曜日にお通じありました。ここのところ、下剤使わずに出てます」「ショートステイ中原因が分からないですけど、新しく皮膚剥けたみたいです。今日また病院に兄が連れて行くからみてもらいま

す」「脱ぎ着するときに左手痛いって言うんですよ。脇の下なのかな、わたしが寝かせようとするとうるんですけど、本当に痛いのかどうかはわかりません。痛いところも変わるし。肩は何ともなかったんですけど。ちょっとみてください」と、排便状況や皮膚状態は訪問の都度気にしている様子があり、また突発的な痛みなどについても気にかけていた。

6) 良くしてあげたい

「今日はまたヘルパーさんに美容院に連れて行ってもらうんです。元々きれい好きだったから。月1回とまではいかないけど、襟足を気にしたりするから」「外の空気も吸わせてあげられるし」と、母親が喜ぶようなことをしてあげたいという思いも表出された。

7) 介護する

「食事の合間に水分を飲ませに行っています」「ケーラーは本人に直接当たらないようにしていますから、ちょうどいいのかなと」「足は拘束してますでしょ。その体勢で前にかくんと倒れたんですよ。2回も。だから危ないからさらしを巻いています。圧迫されると良くないからタオルを当てていますけど」というように、長女なりに母親の身体のことを考え危険防止のために工夫をする姿がみられた。また、介護用品を新たに購入したり、長男と連絡を取り合って受診の手はずを整えたり、ショートステイでの様子を確認するなど、介護行動がとれていた。

8) 介護が大変

「兄は私任せで言われたことはするけどそれ以外はしない」と、長男が介護を自分任せにしていると感じていた。また、「去年足に潰瘍を作って夏の暑い間病院に通いました」「ショートステイのあとは足の力が衰えてしまうのは仕方がないねって言うんですけど、昨日も夫と2人で抱えるようにして階段を上がりました」「おむつ交換は昼間は私にやらせないんです。手を出してきて抵抗するんですよ。何でって言うとお手伝ってるんだって」というような言葉が聞かれ、昨年潰瘍ができ、長期間通院したことが大変だったことから、傷には敏感になっていることや、おむつ交換時本人が手を出してきて大変であるという思いや、他には食事介助が大変であると表出している。

9) 長期の介護は望まない

「もうお葬式のこととか決めてるし、いつどうなってもそのままの形で、っていうのは妹たちも納得してますから」「お弁当は全部食べます。ノートにも完食って。だから、まだまだねえ」と、しばらくは介護が続くそうだと思っている一方で、いつどうなってもそのままの形で、と思っていることが表出された。

10) 介護サービスを頼りにする

「(ショートステイの間) 孫と一緒に出かけたりできたのでよかったです」「(デイサービスでの入浴で) 座って入れるのが危なくなってきたので機械浴にしてるって言われました」というように、ショートステイ中はゆっくり休めたり、デイサービスでの対応が助かっているという思いが表出された。

また、「ヘルパーさんが言ってたんですけど、お尻に褥創っていうの？ できてるみたい」「右側のお尻なんですけどデイで床ずれがあるって言われたんです。病院行ったら薬塗ってマッサージすればよくなるって言われて、薬つけてます。ワゴンが一番上にありますから塗ってください」と依頼していた。長女は褥創処置については自分では見ないでヘルパーや看護師に任せていた。

3. 介護者の思い・態度の変化

カテゴリ一別に見た介護者の思い・態度の時間的变化を表2に示す。

「介護する」「気にかける」という前向きな思い・態度が関わりの前半から後半にかけて一貫して表われている一方で、「母親らしいことをしてもらえなかった」「厳しく当たる」「腹立たしい」といったネガティブな思い・態度もまた、前半から後半にかけて表われていた。また、「介護が大変」という思いは、関わりの前半では毎回見られているが、後半では減少している。一方で、関わりの後半に初めて「良くしてあげたい」という思いが表現されていた。「自分がするのは仕方がない」という思いは関わりの初期のみ表出されていた。

VI. 考察

本事例では、介護者の葛藤の様相として次の内容が明らかになった。長女が介護していく上で、「母親らしいことをしてもらえなかった」という長年抱

表2 カテゴリー別に見た介護者の思い・態度の時間的変化

訪問日 カテゴリー	6/15	6/22	7/1	7/8	7/15	7/22	7/29	8/5	8/26	9/2	9/9
1) 母親らしいことをしてもらえなかった	○						○				
2) 厳しく当たる		○	○				○	○		○	
3) 腹立たしい		○	○		○		○	○			
4) 自分がするのは仕方がない	○										
5) 氣にかける		○	○	○	○	○	○		○	○	
6) 良くしてあげたい								○			
7) 介護する		○	○	○		○	○	○		○	○
8) 介護が大変	○	○	○	○	○			○		○	
9) 長期の介護は望まない			○			○					
10) 介護サービスを頼りにする		○		○					○		

いてきた思いが根底にあり、その思いが「厳しく当たる」態度や「腹立たしい」思いに影響していたと考えられる。その一方で母親の介護を「自分がするのは仕方がない」と考え、「母親らしいことをしてもらえなかった」という思いとの間で葛藤を抱えながら介護を行っている長女の姿が明らかになった。また「自分がするのは仕方がない」という思いには、長女としての責任感、役割意識が影響していた。天谷らは、娘介護者に特徴的な危機のひとつとして「親子の関係性に関わる葛藤の再燃」を挙げており、実の親子という長年の関係性の中から、過去に未解決のままでわだかまった感情がオーバーラップしてくるなど、情緒的な危機が生じることがある⁵⁾と述べており、本研究の結果と一致している。また看護師は日頃から目にする介護者の「厳しく当たる」態度や「腹立たしい」思いなど、問題点に目を向けがちだが、その背景にある思いを汲み取ることが必要と考える。また、認知症を抱えた要介護者を介護する介護者は、腹立たしさやストレスを感じる場面が多くある。介護者に対して繰り返し認知症についての知識や対応の仕方を伝えたり、日々の介護をねぎらうことは、くじけそうになる介護を前向きに当たれるようにするためにも重要ではないかと考える。

今回、3ヶ月間の関わりの中では「母親らしいことをしてもらえなかった」「厳しく当たる」「腹立たしい」といった長女の母親に対するネガティブな思い・態度に大きな変化はみられなかった。しかし、

関わりの後半になって「良くしてあげたい」という思いが表現されており、このような気持ちの芽生えが介護者の変化と捉えることができる。また当初は虐待の可能性も危ぶんだ事例であり、長女が中心となって在宅での介護を継続できたこと自体が評価できる点と言える。木立は、介護者の語りを共感的に聴くことが当事者の考えや努力を認めることになり、ひいては介護者のエンパワメントに繋がる⁶⁾と述べている。本事例でも、看護師の関わりが長女の感情表出や介護を維持する力につながっていたことが考えられる。「介護する」「氣にかける」「良くしてあげたい」といった、長女の介護への前向きな思い・態度も抽出されており、看護師が長女の頑張っている事実を認め、フィードバックしていくことが大切だと思われる。また、介護者に対し大きな変化を期待するばかりではなく、小さな変化も敏感に捉えて承認していく必要がある。さらに、「介護が大変」という思いは関わりの前半には訪問のたびに毎回表現されていたが、後半には減少している。ショートステイの利用の効果や介護への慣れによるものと考えられるが、認知症についての理解を促す関わりや、介護方法の助言などが介護への慣れに役立っていたことも考えられる。

また、「母親らしいことをしてもらえなかった」という思いは、介護者の未成年の頃からの長期に渡る体験の積み重ねが基盤となっており、第三者の介入によって簡単になくなるものではない。看護師は

親子の絆を認識できるように援助しながら、否定的な感情も受け止める関わりが求められるであろう。また、介護者から前向きな発言が多く聞かれるようになり、意欲的に介護に当たられていても、介護者には「母親らしいことをしてもらえなかった」という思いと同様に「自分がするのは仕方がない」という思いがなくなったとは限らない。状況に応じて介護者の心の揺れもあるであろうし、置かれている心理状況によっても感じるストレスの度合いが違ってくるだろう。思いや感情は流動的なものであり、それに何が影響しているのか介護者－要介護者間の相互作用を正確に捉えていくことが重要である。

岸川らは、在宅痴呆患者の介護者における介護に対する考え方と介護負担感との関連についての研究で、「喜び・献身など介護に対して積極的な感情を抱いている介護者は介護負担感が低く、『仕方ないと諦めている』『腹立たしく思う』など、諦めや怒りに近い感情を抱いている介護者は介護負担感が高い傾向がある」⁷⁾と述べている。また、介護者の介護負担感は身体的介護量だけでなく介護者の心理的側面に影響されることを示唆している。今後は単に介護者の苦勞をねぎらうだけでなく、天谷らの述べるように介護者の介護に対する心理的受容過程への支援、介護者が自分の人生において要介護者の介護を肯定的に意味づけられるような支援が求められている⁸⁾と考える。また、古瀬は「主体性を獲得しても互酬性を認識していない介護者に対しては互酬性への気づきを促進できるような介入が必要となる」⁹⁾と述べている。介護が生きがいとなっている介護者もいれば、介護が生活の一部となっている介護者もいる。そのような介護者は看護師からは楽しく介護を行っているように映る。それらの介護者は介護に何らかの意味を見出すことで、介護している自身を認めているのではないかと考える。仕方なく介護を行っているという思いが強いような介護者も、その意味を見出すことができれば前を向いた介護になるのではないかと考える。看護師は介護するという意味を一緒に考え、介護者がその意味を見出すことができるよう支援していくことが必要である。

VII. まとめ

1. 介護に対し葛藤を抱えた介護者の思い・態度として、「母親らしいことをしてもらえなかった」「厳しく当たる」「腹立たしい」「自分がするのは仕方がない」「気にかける」「良くしてあげたい」「介護する」「介護が大変」「長期の介護は望まない」「介護サービスを頼りにする」の10のカテゴリーが得られた。長女は「母親らしいことをしてもらえなかった」という思いと「自分がするのは仕方がない」という思いの間で葛藤していたと考えられる。
2. 3ヶ月間訪問看護を実施する中で、介護者の思い・態度の変化として、「良くしてあげたい」という思いが関わりの後半に現れ、「介護が大変」という思いは減少した。
3. 看護師は介護者の問題点ばかりでなく、その背後にある思いに目を向ける必要がある。また、看護師は介護者の思いを受け止め、努力や小さな変化を認める関わりをしていくことが、介護者の介護を継続する力につながる。
4. 介護者にとって介護が意味あるものとなるよう、看護師は介護者とともに介護するという意味を考え、介護者がその意味を見出すことができるよう支援していくことが必要である。

VIII. 本研究の限界と課題

本研究は1事例の研究であり、一般化には限界がある。今後は症例を増やして分析を重ねる必要がある。

謝 辞

本研究を行うにあたり、研究協力をしていただいたご利用者様とご家族の方に、心から感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 和田攻他. 看護大事典. 医学書院, 2002, 3166p.
- 2) 松村明他. 大辞林. 三省堂, 1988, 2616p.
- 3) 梅棹忠生他. 日本語大辞典. 講談社, 1989, 2302p.
- 4) 鈴木和子・渡辺裕子. 家族看護学－理論と実践. 第2版. 日本看護協会出版, 2003, 282p.
- 5) 天谷真奈美他. 痴呆性高齢者を介護する娘介護者の危機. 埼玉県立大学紀要. Vol.4, 2002, p.87-93.
- 6) 木立るり子. 在宅介護における情動の語り－家族介護者へのインタビューから－. 弘前大学医学部保健学科紀要. Vol.1, 2002, p.41-50
- 7) 岸川雄介他. 在宅アルツハイマー型痴呆患者の介護者に関する社会医学的・心理学的研究－“介護に対する考え方”と介護負担感との関連－. 京都府立医科大学雑誌. Vol.8, 2003, p.609-617.
- 8) 前掲書 5)
- 9) 古瀬みどり. 要介護者を介護する家族の苦勞認識プロセスに関する研究－他者の介護体験認識とのずれの分析から－. 家族看護学研究. Vol.8, no.2, 2003, p.154-161.